ミニ展示「戦後80年 あのとき新聞は何を伝えたか」1945年5月展示紙面リスト

1945年4月の出来事	新聞名	新聞日付	補足説明
THIS IS VE-DAY	THE DAILY SKETCH	1945年5月8日	1945年5月7日、ドイツの無条件降伏で、欧州戦線は終結した。翌日午後のチャーチル首相によるラジオでの勝利演説を待つことなく、多くのイギリス市民は街へ繰り出し、勝利に酔いしれた。5月8日はヨーロッパ戦勝記念日（Victory in Europe Day）と呼ばれている。
全独軍 無条件降伏	毎日新聞	1945年5月9日	ドイツのカール・デーニッツ総統が無条件降伏を公式発表したと伝える。デーニッツはアドルフ・ヒトラーの自殺後、大統領に就任した海軍軍人。
上諭拝す 戦時教育令	読売報知	1945年5月22日	「戦時教育令」はすべての児童・生徒を戦争動員するために公布された勅令。学校ごとに学徒隊を組織し、食糧増産、軍需生産、防空・防衛に従事させるため、体制強化を図った。
都内への空襲を伝えた共同新聞	共同新聞	1945年5月27日	米軍機による大規模空襲を伝える。都内の大半が焼失したこの空襲で読売報知などが全焼したため、朝日新聞と毎日新聞が「共同新聞」の題字で特別紙面を製作し、被災した各紙の読者に届けた。展示の紙面は毎日・朝日新聞がそれぞれ発行したもの。本紙において5紙の題字が並んだのはこの日だけだが、その後も代行印刷など協力関係が続いた。
B29五百機、P51百機 横浜市を白昼暴撃	朝日新聞	1945年5月30日	米軍による5月29日の無差別爆撃で、横浜市では市民約8000人が亡くなり、中心部が壊滅的な被害を受けた。戦後、残った施設・建物も多くは連合国軍に接収され、横浜市は苦難の道を歩んだ。この紙面は朝日新聞が製作したが、同25日の東京の空襲により発行不能となった読売報知、東京新聞の代替紙として、両紙の題字も掲載している。
素人にも作れる強い決戦住宅 読書も十分できます	朝日新聞	1945年5月7日	空襲にも耐えたという工場の壕舎を手本に、材料や手間がかからない地下壕の作り方、機能について解説している。直撃弾には耐えられないが、焼夷弾や機関銃は大丈夫らしい。「光線が入るので」読み書きもできるとのことだが、空襲下で読書したいと思う人がどれほどいたのだろうか。それとも、こんな状況だからこそ、心の支えは読書だったのだろうか。
盗難ご注意 防空壕も狙はれる	朝日新聞	1945年5月16日	「盗む者が悪いにはきまっているが」と始まるこの記事。貴重品は「必ず警報の都度持ち込む」「解除になったら危険のない場所に移す」ことが被害を防ぐポイントだとか。空襲など、恐怖や不安と隣り合わせの日常。防犯にまで気を配るのは難しかったのではないか。
敗因は戦力過信	毎日新聞	1945年5月17日	「敗因は戦力過信」の見出しの記事では、同盟国・ドイツの敗因について「ソ連戦力の過小評価」「自国戦力の過信」「ルーマニア油田の喪失」などを挙げ、冷静な分析をしている。一方、「集中砲火を縫ふ 戦慄の特攻」という見出しの記事は、特攻作戦について「日本民族一億の決意をのせた正攻法である」としている。冷静な分析と精神論に基づく無謀な戦略が、同じ紙面に掲載されているのが興味深い。読者はどう捉えていたか。
デマに迷うな 怪しい事はすぐ届けよ	毎日新聞	1945年5月28日	東京への空襲後、沖繩戦に関して「米軍が無条件降伏した」などの流言が都内に広まっているとして、デマらしい話を聞いたら交番や警察署にすぐに通報するようにと当局が呼び掛けた。通報を受けて警察が何をするつもりなのかも気になる。偽りの戦況を発表していた当局側に対し、内心「どのクチが言う」と思った人もいたのでは？
燃ゆる向学心（投書欄）	読売報知	1945年5月10日	東京・神田の書店街は、教科書などを買いに来た新入生たちで混雑していた。授業停止にも爆撃にもくじけず勉強しようとする姿に、投稿主は心強く感じたという。「生徒の向学心が変わりはない」とした上で、当局の教育方針などが残された課題と指摘。もっともな環境で若者たちに学ばせてあげたかったという投稿主の思いがにじむ。